ます。宗教の厭世を攻撃するのみではない、世の中の宗教を信じない人でも、世の中は生活が困難だとか、苦しいとか、人生は面倒くさいと云ふやうな、さう云ふ人々をも皆救うて居る言葉であります。『そんな情けない事を言ふナ、此の世界は非常な立派な世界であるのだけれども、お前等の果報がつたないから、それを味ひ得ないのである』と言ふ、佛教は厭世教どころではない、世間の人間悉く皆本當の見方をしないから、眞に此の世界の價値を説明したるものが佛教であります。下らない人々が言ふ厭世とか樂天とか、さう云ふ桁を以て、佛教は批評せられないものである。

是の諸の罪の衆生は、惡業の因緣を以て、阿僧祇劫を過ぐれども、三寶の名を聞かず、

さう云ふ立派な世界であるけれども、惡い事をして居る罪の爲に、永い年代を經ても三寶の御名前さへも聞くことが出來ない。本佛の御名である所の釋迦牟尼佛、法の御名である妙法蓮華經、僧の御名である上行菩薩、再身日蓮聖人の此の三寶の御名前さへも聞くことが出來ない。假に聞いても之に對して却つて惡感を懷いて、釋迦牟尼佛の尊い所以、妙法蓮華經の尊い所以、本化日蓮聖人の尊い所以が分らぬやうになつて居る者は、皆是れ罪の衆生であると云はれるのであります。であるから罪の爲の故に其の尊い事が分らぬのである。

(八〇)修德質直の人は本佛を拜す

其の次は、善い考が起つて信仰の方へ向いて來る場合があつたならば、直に佛様にも遇ふことが出來る所以を説明せられて居るのであります。

諸の有らゆる功德を修し、

有ゆる功德と云ふのは宗教の信仰ばかりではありませぬ、今の日本の佛教徒は、功德と云へば塔婆を書いてお經を讀むのと、お賽錢上げると云ふことに限つて居るが、そんな事ばかりが功德ではない。佛教で説く功德の根本と云ふも

のは、偉大なる慈愛の精神を以て、生ける者を救ふ所の働きであります。木に字を書いたり、グジャ〳〵お經を讀んで、木魚をポク〳〵叩いて居る位の事は大したことではない。生きたる熱誠を以て、生きたる人類を救ふ爲に、生きたる活動を起す所が眞の功德である、併しお經を讀むのも惡い事ぢやありませぬ、寐言を云つて居るより宜しいけれども、同じやうな事を唯だ繰返して、途中で欠伸をしたり居睡りしてやつて居るのは、小言を云うて居るより宜い位で、善い話をして居るより少し惡い位であります。諸の功德と云ふのは、世の中の爲め國家の爲に盡す事も、文明の爲に盡す事も、すべて生ける救濟を指すのであります。政治と云つても教育と云つても、人生の經營と云ふものは皆自分一人の爲めではないので、相寄つて以て生ける人々の幸福を增進するものである、一國に取つては一國の人民の幸福を保障し、大にしては世界の人類の進歩に資せんとして働いて行く所に、功德と云ふものがあるのであります。それが形の

方から行くのと、精神の方から行くのと、少し方面が違ひますけれども、佛敎に云ふ功德とは精神を本として物質の方にも及んで居るので、實に非常に廣い意味を有つて居るのであります。

柔和質直なる者は、即ち皆我が身、此に在つて法を說くと見る、

さう云ふやうな色々の功德を修めて、さうして前に言うた人間の本當の優しい正しい精神が起つて來れば、何時も大勢の者を救ふべく働きをして居る所の活動の本佛が、此處に存在して居ると云ふことを其の者は知ることが出來る。功德が足らないが故に、正しい精神が足らないが故に、質直が足らないが故に、此の本佛の實在して活動して居るのを知る事が出來ないのである。

或る時は此の衆の爲に、佛壽無量なりと說く、

釋迦牟尼佛は或る場合に於ては涅槃すると云ふより、何時も佛は常住であると云ふことを、今壽量品に說かれるが如くお說きになる。さうして又

久しくして乃ま し佛を見たてまつる者には、爲に佛には値ひ難しと說く、生れ代り死に代りして佛に漸くにして遇へる者には、佛には滅多に遇へない者である、幸に生れ合せて來たと云ふのは有難いことであると說く。今吾々はお釋迦樣には遇はれんけれどもお釋迦樣のお說きになつた敎が殘つて居る所に出會つた、幸に佛敎と云ふものが日本に存在して居つて――諸君は未だ佛敎の有難さが十分に分らぬかも知れぬけれども、此の佛の敎である佛敎と云ふものが存在して居らなかつたならば、日本の世の中と云もふのはモウ一層暗黑なものであらう、是が衰へたりと雖も先祖代々千數百年間、日本人の精神に打込まれて來たから、是だけて未だ喰止めて居るのである。此の佛敎が千三百六十六年日本に無くて、唯だ神ながらの敎と儒敎だけて日本が來て居つたならば、日本人はモウ一層現實化し、モウ一層俗惡化して、今頃はモウ餘程激しい腐り方をして國家は滅亡せんとするに至つたかも知れない、未だ〳〵衰へても家に佛壇があつたり、お寺にお詣りしたり、形式だけても手に珠數を持つたりするので、人は優しくなければならぬ、人は正しくなければならぬと云ふ刺戟を、此の佛敎の爲に與へられつゝあるのである、それは皆此の佛樣のお蔭である。でありますからさう云ふやうな敎に觸れたと云ふのは、誠に容易ならぬことで、世界を見渡しても日本は幸に佛樣の敎がある、西洋人に言はしたならば、憐れな國である、基督の敎が無い國だと云つて悲んて呉れるかも知れぬ、其の御親切は有難いが、吾々は幸に佛陀の敎に依て、信仰を有つて居る國であります。而して佛陀の敎と云ふものは、決して基督敎と對抗して戰つたり、基督敎と軋轢を生ずるやうな敎でないのでありまして、基督敎に於て言ふ善い所は、悉く取つて佛敎は之に贊成を表するのであります、基督が善を主張すれば、吾々は兩手を擧げて贊成します、基督がやさしい愛を說明しますれば、それは吾々も熱心に贊成することであります、基督の特色とする所が善であれば、佛敎に

於て一つも之を非難排斥しないのであります。唯だ彼等は哲學的の基礎に於て淺薄なる思想に甘んじ、神様が世界を造つたとか、磔になつた基督がフーッと雲の上に昇つたとか、或は復活祭と云ふ時に於て、葡萄酒を飲んで、其の葡萄酒は其の儘基督の血ぢやとか、パンを食つてもパンと思つてはいかぬ、基督の肉ぢやとか云ふやうな事は、それは善い事でも宗教に傳はる一種の形式だから、それは佛教で護摩を焚いて煙の中で咽んで居るのも同じ事ぢや。割合に基督教徒は頑固だ、基督教は文明の宗教だと云ふけれども、餘程頑迷くさい所の宗教である。佛教ではさう云ふやうな事を考へて居らぬ、善い所は皆取つて宜い、手をつないでも宜しい、決して他を排斥したものでないから、印度に於ては婆羅門教をも包容し、支那に於ては儒教とも合體し、日本に來ては惟神の教とも一致して、坊さんが皆神様の前に行つて、ちやんと別當として神に給仕奉公したものである。基督教徒は日本の神様に對して別當にしてやると云つたら、馬鹿な事を言へと云つて腹を立てるであらう、洵におかどの取れない教であります。であるから西洋は中々立派な文明の國でありますけれども、割合に人間は頑固だと思ふ。日本の佛教は決して何も彼等と軋轢的にやるのではない、モウ少し氣の廣い世界の人心を調和し得る所の偉大なる宗教が發達せんことを理想とするのである。

我が智力是の如し、慧光照すこと無量にして、壽命無數劫なり、久しく業を修して得る所なり、

佛様は斯う云ふやうな立派な智慧があり、働きがあるのであり、御壽命は限なく存在してあらせられる。それは佛様が宏大なる德を積んで、さうして其の上に得て居らるる所の御壽命である。

（八一）一代開顯の妙旨を明す

其の次は佛のなさる仕事は決して僞りはない、方便と云ふものはあつても、

眞實に進んで來た場合に於ては皆それが活きて來る事を説明されて居るのであります。丁度人間が教育を受ける場合に、初めはお伽噺から始つて仕舞は大學卒業まで行くのでありますが、其のお伽噺は一寸考へると嘘のやうな桃太郎の話であるけれども、其の中にやはり日本人の最後の道德が含まれて居るやうなものであつて、佛の説法は阿含の初めから法華涅槃の終りに至るまで、其の本意を看破つた時に於ては一切活躍して居る所の大宗教であると云ふことが説かれて居るのである。

汝等智有らん者、此に於て疑を生ずること勿れ、當に斷じて永く盡きせしむべし、佛語は實にして虚しからず、

此本佛の活動が本になつて、今の佛教と云ふものは起つたのである、であるから決して其處に疑を起してはならない、又どうしても其の疑が斷ち切れぬ者は、佛の方から力を貸して其の疑を無くするやうにしてやらう。佛の説いた教と云ふものは、決して偽りの無いものである、一切經悉く眞實であると云ふことを了解するやうにしてやらう、と仰せられる。法華宗は他の阿彌陀經を攻撃するとか、大日經を攻撃するとか云ふやうにお考への人がありませうけれども、さうではない。阿彌陀經に依つて法華經を蔑ろにするのを攻撃するのである、阿彌陀經や大日經と云ふものは少つとも邪魔にならない。其の邪魔にならぬと云ふ事の證據は、私は近頃大藏經要義を書いて居りますから、一年二年と續けて行く中に、一切經は皆成程法華經と同じ方向を取つて居つた、圓滿珠の如きものが一切經であつたと云ふことを、諸君の前に私が證明する積りである、今でも阿彌陀經を諦觀したならば、決して法華經と逆行して居るものでない、唯だ枝葉のお經に依つて法華經を非難したり、本佛を忘れたりするから、日蓮聖人が其の誤りを攻撃せられたのである。そこで一切經悉く眞實であると云ふことに達するのであります。

(八二)治子の譬に寄せて實在の義を明す

それから其の次は、佛が此の世の中に出てお働きになつた事を、譬を以て說いて居るのでありまして、

醫の善き方便をもつて、狂子を治せんが爲の故に、實には在れども而も死すと言ふに、

前に詳しく譬が擧つて居つた、お醫者が子供を治す爲に餘所の國に行つて、假に死んだと云ふ使をよこして、其の子供の心に刺戟を與へて、さうして心が醒めて藥を食むやうになつた。斯くの如く如來は方便を以て涅槃を現ずるけれども、實には不滅の如來である。此の實在——宗敎でも哲學でも實在と云ふ語を澤山使ひますが」是は壽量品が實在の本家本元であります。「實には在れども、而も死すと言ふ」、唯ださう言ふのであります。

能く虛妄を說くもの無きが如く、

眞實實在である者が死んだと云ふやうな事を言つては、嘘を吐いたと云ふてあらうけれども、それは嘘ではない、其の子供を救ふが爲に暫くさう云ふ驚きを與へて改心さすのである。それは決して嘘と云ふものではない。

(八三)本佛は我等の父なり

我れも亦爲れ世の父にして、諸の苦患を救ふ者なり、

此の釋迦牟尼は一切の人々の精神上の父である。基督敎で天の神樣を父と言ふと云つて、基督敎の人が誇りとして居りますけれども、佛敎は確に基督敎より古い宗敎である、如何に近く見ても佛敎が世に現はれてから以來二千三百年以上である、東洋では三千年と云ひますが、假に一番近い說にして考へましても、二千三百年であります。基督が生れてから今までは——即ち二十世紀でありますが、併し二十世紀に入つて未だ二十年にならないから、千九百十七年であります。千九百十七年であつて見ますれば、二千三百年前に現はれて居る所

の法華經の方が先だと言はなければならぬ、『父である』と云ふことは法華經が本であります。基督教などは世界に現はれた文明の上から見ますれば、寧ろ佛教の影響を受けて、基督の神は父であると云ふやうな言葉が、バイブルに現はれたとの説もあります。今は基督教などの影響を受けたものでなくして、基督教あたりの先覺者として、壽量品には『我は汝等の父である』と説いて居る。馬鹿な法華宗の人は、「本多師が近頃基督教にかぶれて、佛様の事を父ぢやと云ふやうな事を言ひ出した、飛んだ事を言ひ出した、法華が基督教に改宗した」と云ふやうな事を言ふ人がありますけれども、是は大馬鹿三太郎と云ふものである。物は年代を考へて見んければならぬ、法華經は唯だ今申す通りに、今日の歴史的研究から見て基督教よりはズッと古いものであります。而して此處にはつきり『父』と云ふことがある、是は宗教の意識としては一番善いのであります、吾等の信ずる所の佛様を父の如くに考へる、父と云ふのは親切があり、さうして侵すべからざる權威がある、恩威兼ねて居る者が父であります、お母さんも優しくて宜しいけれども、お母さんの方は少し威が足らないのであります、それでやはらかな人々の爲には佛は母の如しと云ひますけれども、一般の信仰の上に於てはやはり父の如しと云ふことでなくてはならぬのであります、父母どちらを取つても宜しいけれども、一つに現はす時分には『父の如し』……優しい所と侵すべからざる所とがあります。我は汝等の父である、さうして『諸〻の苦患を救ふ者なり』――此の諸〻の苦と云ふ中には、現在の苦みもあり、未來の苦みもあり、精神の苦みもあり、肉體の苦みもあり、一切含んで説明されて居るのであります。

(八四)方便の滅度は衆生の爲めなり

其の次は佛は世に出られてから、さう云ふ精神を以て如何なる者をも悉く救ふ爲に、それに適當したる所の教をお立てになつた事を仰しやるのであります

して、

凡夫の顚倒せるを爲つて、實には在れども而も滅すと言ふ、

、なみの人間と云ふものは心が引繰返つて居る、引繰返つて居ると云ふのは、長く親切をすれば一層有難く思はんならぬのだけれども、丁度金持の親が子供に不自由のないやうに親切にすれば、金持の息子は親の有難い事が分らなくなる。をかしいもので、貧乏で少と行屆かぬやうな親——着物一枚買つてやることが出來ないやうな親だと、子供が有難く思ふ、『今日は錢がないから御飯がたけない』と云つて、晩飯を食はされないやうな目に遇はされると、親が有難いと云ふ事が分つて來る、人間は妙なものだ、其處を佛樣は說かるゝのである。お前等の心は引繰返つて居るから、親切を徹底的に何時もやると馬鹿にするやうになるから、そこで俺は何時も實在だけれども、姿を隱して汝等の覺醒を促すのである、是は確にその通りである。親が達者で十分にして呉れて不自由がないと、相當の立派なお役人の息子でも、不良少年になつたり、馬鹿息子が出來たり、非常な金持の息子に仕方のない奴が出來たりする。であるから豪い人間はどうしても困苦缺乏の中から生じて來るのである。あなた方が子供を思うにも、餘り十分な事をして、遊んで居つても横着をして居つても間違ひなく食へるやうにと云ふやうな事を考へて、一生骨折るのは駄目である、少しは彼等を奮勵せしむる途を作つて置かなければならぬ。そこで子供に與へるものは何が一番大事かと云へば、金よりも其の人格を作ることゝ、それから其の者に傳へる教訓と宗教の信仰である。然るに信仰を與へず、人格を作らず、其の家に於ける家憲、教訓と云ふもの無しに、唯だ株券とか田地と云ふやうなものばかり遺るから、跡の子供が馬鹿息子虛榮娘になつてしまう。是は日本人の一般的智識が低いのであります、コンモンセンスが缺けて居るのであります。誰も彼も金を拵へて、息子娘が遊んで居ても食はれるやうにと云ふ事ばかり考へて居

る、馬鹿を澤山拵へるやうに、腰拔を拵へるやうにと日本の親は努力して居る、さう云ふ事ではいかぬ。そこでお釋迦様は賢いから、馬鹿息子を拵へてはいかぬとのお考から、父の親切としてはモット〳〵と思ふけれども、少しは吃驚する事を殘して以て涅槃に入ると云ふのである。そこで佛敎は復活した、お釋迦様のお考の通り外れなかつた、お釋迦様は賢いから、親切を十分やつてモウ少しと思ふ所でパッと涅槃したから、ハッと大勢の者が吃驚した、そうして偉大な感激と活動と事業との結果が現はれて參つたのであります。さうしなければ、

常に我れを見るを以ての故に、而も憍恣の心を生じ、放逸にして五欲に著し、惡道の中に墮ちなん、

『五欲』と云ふのは五官から起る低い劣等なる欲望の方にのみ落ち込んで、終ひには地獄、餓鬼のやうな惡道の中に墮ちるやうになつてしまう。さうして佛は何時も間斷なく、大勢の者が是は善い方へ向ふか、未だ善い方に向はぬかと云ふことを、一人々々の精神を見て知つて居らるる、佛は大自在力を有つて居るが故に、あなた方の精神も、是は向上しつつあるか、未だ向かぬかと云ふことを、何時も考へて居つて少しも過たない。佛の慈悲は何時もお月様が照して居らるるやうなものであつて、此のコップの中に水が溜りさへしたならば、直ぐ此處に月影が映つて來る、芋の葉の上に露が溜れば、直ぐそれに月が映るのである。佛は一切の者の上に感應の光を發射して居るから、此方に向上心信仰心の露が溜れば、直ぐ佛の感應は映つて來る。

(八五)衆生に適應せる妙化

我れ常に衆生の、道を行じ道を行ぜざるを知つて、度すべき所に隨つて、爲に種々の法を說く、

何時も汝等の道を行ずべき精神に向いたか、未だ其の方へ向ひて來ないかと

云ふことを見て、ちやんと適當した救ひを與へ又樣々に敎を說く、如來一代の行動と一切經と云ふ廣大なる宗敎となつて今日に殘つたのであります。

（八六）本佛三輪の妙化を結す

それから終りの四句は有名な句でありまして、栂尾の明惠上人は此の文に對しては、泣いてヨウ讀まなかつたと云ひ傳へて居る、日蓮聖人も此の言葉に對しては感涙に咽ばれたのであります。

毎に自ら此の念を作す、

本佛は何時も他の事は考へては居られぬ、何時も――佛は寢ると云ふことも ないので、夜でも晝でも斯う云ふ事を考へたまふ。それはどう云ふ事かと云ふ と、どうかして彼等の迷へる總ての者を救ふてやらなければならぬ、

何を以てか衆生をして、無上道に入り、速に佛身を成就することを得せしめんと。

小さい所から云へば苦勞を拔いてやるのであるけれども、一旦拔いても又苦勞するから、モウ永久に苦まない所の佛にしてやらう、佛の覺を開き、眞の智慧と、眞の慈悲と、眞の活動と、無現の生命を現はす所の佛にまでしてやらうと思はれるのであります。此「毎に自ら是の念を作す」と云ふ「是の念」と云ふのが大慈悲である、「何を以てか」と云ふ所からは、身を現はし法を說いた釋尊一代の化導である。此に於て佛敎が幾ら擴がらうとも、「是の念」と「何を以てか」と云ふことに依つて、佛敎は一切納まつてしまう。如何なる佛敎と雖も、お釋迦樣がどうぞ救つてやりたいと云ふ「是念」即ち釋尊の大慈悲と、「以何」と云ふ事から、先づ身を現はし法を說くと云ふ事になるので、此「是念」と「以何」より外に佛敎は無いものである。此の釋尊の大慈悲を忘れ、「何を以てか」と云ふ佛陀の出現と說法との活動を忘れて、佛敎徒の精神の歸着が何處に在るか、源を忘れてしまつては佛敎の落付く所はないのであります。故に日蓮主義者は

「毎自の悲願」「是念の悲願」と云つて、之を日夜朝夕に憶念するのであります。阿彌陀如來の四十八願などは、釋尊の「是念」の一波瀾に過ぎない、又悲華經には、釋迦の五百の大願が說いてあるけれども、是等は皆「是念」の一波動である、阿彌陀の四十八願と云つても、阿彌陀樣が自分で立てたのではない、釋尊の慈悲心の一部を說き示めされたものである、悲華經で五百の大願に說き分けたのも、皆釋尊の慈悲の一部であります。阿彌陀樣は有るものか無いものか、お釋迦樣の說法の上に生れ、說法の上に統一されたのでありますから、その根本を信解すれば、本佛釋尊の大精神の一波動であります。

(八七)佛教興立の大精神

それがどの宗旨に影響があらうとも、其の影響などを考へて居る譯には行かぬのである。是から佛教の生存發達と、其の敎化の眞目的を全ふすることから考へると、世界の思想と戰はんければならぬので、敵は何處に在るかと云つたならば、眞宗や淨土宗などではない、佛敎內の宗派見に局して善い惡いと云ふて居る時代でない。佛敎は世界の有ゆる學術、有ゆる思想、有ゆる倫理、有ゆる宗敎と戰つて最後の勝利を得て、一切衆生を佛陀の光明の中に救はんければならぬのであります。佛敎內の宗旨に遠慮して、佛敎全體が價値なき宗敎として滅びるのを默視することは出來るものではないのであります。吾等が時々彼等の宗旨を批判するのは、彼等の宗旨と戰ふと云ふやうな小さい考ではない、此の佛陀の敎を世界の人類の上に、文明の最後にまで光輝あらしめやうと云ふ考の爲に言及せざるを得ないのであります。

(八八)東西文明の決勝點

そこでお自我偈の全體が濟んだのでありますが、尙ほ玆に一言して置きたい事があるのであります。此の自我偈の說が基督敎と佛敎との決勝點であると云ふことは、昔或る學者が言つたのであります、基督敎と佛敎とを比較するに、

阿彌陀經などを持つて來て比較すると、例へば阿彌陀如來は十劫正覺だと云ふ基督の神は無始無終、全知全能、世界の始めより存在せりと云ふ、是ではちよつと負ける、佛敎の方は勝手に手前味噌の事を云ふけれども、どうも基督敎の神樣の方が、哲學的に見ても價値がある、向ふは世界の根本で全知全能である、此方は法藏比丘と云ふ坊さんであつて、後に五劫を經てのそり〳〵佛になつて、それより已來十劫と云ふ年限である、其の前には澤山佛があつたと云ふ、さうすると實在と云ふことにならないのである、十劫でも百劫でも途中から出て來たものは、モウ一つ前にえらい者がある、モウ一つ前にえらい者があると云ふことになると、宗敎は一番えらい者の所まで押詰めんければならんのである。假に阿彌陀樣の立てた誓願に賴るが、修行が仕易いと云ふやうな、途中で一寸引掛つて宗敎を立てゝ居るのは、今までの低い考である、苟も世界的思想が襲うて來た時分には、さう云ふ事では駄目であります。故に基督敎と佛敎との決勝點と云ふか、調和點と云ふものは、どうしても此の壽量品を提供して、日本の宗敎は是が基本であると云つて、歐米の思想界へ押出すべきものであります。

さうして其の批判を聞いた時に何と言ふかと云ふと、今まで基督敎徒が佛敎を批評するのを見ると、厭世的宗敎である、死んでから先きの敎だと云つて嘲つて居るが、壽量品に對しては曾て可否を言ふた人が無いのであります。唯だ一人アーサー、ロイド博士は長く日本に來て居りましたが、終に新基督と云ふ名の下に、壽量品の趣意を以て基督敎は解釋すべきものであると云ふ意見を發表いたしました。併し少し附會をして、基督敎の影響を受けて壽量品は出來たものだ、壽量品は基督敎の眞似をしたものだと言ふのでありますが、それは年代が許しませぬ、どうも壽量品が宜いと思つたから、そこで基督敎の眞似をして壽量品が出來たと云ふやうな事を無理に言ひました。西洋の本當の思想家

は、新基督と云ふ名の下に壽量品を迎へるか、基督教と調和したる思想として迎へるか、それは幾らか負け惜みの事はありませうけれども、そんな事は宜しい、本家爭ひなどはどうても宜しい。此の法華經の思想に依つて歐米の宗教の狹い一神思想を改善することが出來るならば、確に東洋文明の誇であります。さうして是は私が唯だ此の小さな會堂に於て、諸君等の前に斯くの如き誇大な事を言つて、一時の感情を喜ばして居るのではありませぬ、是は事實將來東西文明の決勝點に現はれて來る問題であることを、私は此處に明かに豫言するのであります。西洋の人は日本人より宗教の問題に於て眞面目であります、必ず私が言ふ通り、壽量品が佛教の精神である、日本人の宗教は之を根本としたものであるから、日本の宗教を可否しやうと思ふならば、先づ之を研究して呉れと云つて提供したならば、確に西洋の人は之を味ふ時代が出て參ると信じます。而して此の壽量品に含まれて居る思想の遠大なることに、彼等は確に驚く時があらうと思ひます。さうしたならば眞に東洋の文明をも尊敬するに至りませう、何分今日は日本では狐を拜んで居るとか、狸を拜んで居るとか云ふやうに西洋人は考へて居りますから、駄目であります。どうしても今後は思想の問題である、昔は法律などに依つて國の文野を分けて居つて、條約改正が我國の一大事であつたけれども、今は道德、宗教の問題に於て、今後世界の文明に乗り出して行かなければなりませぬから、諸君よ、諸君にして、果して眞正に日本を愛し、東洋を愛し、最後世界の文明に華を咲かさうとの道念あらば、どうぞ此の眞正なる佛教の爲に同情を寄せられんことを希望するのであります。

持法華問答鈔　上根に望めても卑下すべからず、下根を捨てざるは本懷也。下根に望めても憍慢ならざれ、上根も漏る事あり、心をいたさざるが故に。凡そ其の里ゆかしけれども道たえ緣なきには通ふ心もをろそかに、其の人戀しけれども憑めず契らぬには待つ思もなをざりなるやうに、彼の月卿雲

客に勝れたる靈山淨土の行きやすきにも未だゆかず、我即是父の柔輭の御すがた見奉るべきをも未だ見奉らず、是れ誠に袂をくだし胸をこがす歎ならざらんや。暮行空の雲の色、有明方の月の光までも心をもよほす思也。事にふれおりに付ても後世を心にかけ、花の春、雪の朝も是を思ひ、風さはぎ村雲まよふ夕にも忘るゝ隙なかれ。出る息は入る息をまたず、何なる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れ、何なる月日ありてか無一不成佛の御經を持たざらん。

流布の時は末世法滅に及び、機は五逆謗法をも納めたり。故に頓證菩提の心におきてられて、狐疑執着の邪見に身を任する事なかれ。

七難即滅七福即生を祈らんにも此の御經第一也、現世安穩と見えたれば也。

佗國侵逼の難、自界叛逆の難の御祈禱にも此の妙典に過ぎたるはなし、令百由旬內無諸衰患と說かれたれば也。然るに當世の御祈禱はさかさま也、先代

流布の權敎也、末代流布の最上眞實の秘法にあらざる也、譬へば去年の暦を用ゐ、烏を鵜につかはんが如し、是れ偏へに權敎の邪師を貴んで未だ實敎の明師に値はせ給はざる故也、惜哉文武の卞和があら玉何くにか納めけん、嬉哉釋尊出世の髻の中の明珠今度我身に得たる事よ。十方諸佛の證誠として

いるがせならず、さてそは一切世間多怨難信と知りながら、爭か一分の疑心を殘し、決定無有疑の佛にならざらんや。過去遠遠の苦みは徒らにのみこそうけこしか、などか暫く不變常住の妙因をうへざらん、未來永永の樂みはかつかつ心を養ふとも、しゐてあながちに電光朝露の名利をば貪るべからず。三界無安猶如火宅は如來の敎へ、所以諸法如幻如化は菩薩の詞也、寂光の都ならずば何くも皆苦なるべし、本覺の栖を離れて何事か樂みなるべき、願くは現世安穩後生善處の妙法を持つのみこそ、只今生の名聞、後世の弄引なるべけれ、須らく心を一にして南無妙法蓮華經と、我れも唱へ佗をも勸めん

のみこそ、今生人界の思出なるべき。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。

法華經の心髓 終

大正六年十月十一日印刷
大正六年十月十七日發行
——（法華經の心髓奥付）——
（定價金八拾錢）

著者兼發行者　東京府荏原郡品川町字南品川四百十二番地　本多日生

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

不許複製

發行所　東京市外品川妙國寺内　大藏經要義刊行會
振替口座東京一三五九六番

I 1138

終